人間科学科の歴史について

人間科学科教授　前　田　明　伸

教養学部創設30周年記念論集の発刊にあたり「思い出の記」の執筆を依頼されました。この依頼は各学科の歴史をよく知る人物に依頼されたと聞きましたが, 私自身は1989年（平成元年）の教養学部の創設期にはほぼ人間科学専攻の準備には何も関わっておらず適任ではないと固辞しました。しかしながら東北学院大学に着任して39年目で年齢的に一番上という立場もあり引き受けることとなりました。

人間科学科の全体の歴史を客観的に顧みることは不可能なため，体育学領域の，一教員としての人間科学科（専攻）の関わりや2005年の教養学部改組の時期に専攻主任，学科長の立場にあったのでその頃の出来事や事情についてすごく曖昧な記憶を辿りながら書き進むことにします。これ以降の記述については記憶が定かではないため間違いも多々あるかとは思いますがお許し頂きたいと思います。

1.　人間科学専攻と体育学分野の関わり

創設期の人間科学科は心理学，社会学，教育学，人間学グループに体育学領域の教員で構成されていました。その中でも体育学領域の教員は11名も所属しており人数的には一大勢力でしたが実質的には中村雄志先生（故人），黒澤直次郎先生（故人）が人間科学の専門科目を1科目ずつ担当されていたに過ぎませんでした。他の9名は当時必修であった保健体育科目の授業を多数担当することで時間的に余裕が全くない状況だったと記憶しています。

その後，1991年に大学設置基準が改正され本学でも規制緩和に伴い保健体育科目が必修から外され授業時間数が激減し，スポーツ実技では適正な人数によるやる気のある学生たちと共に運営できるようになり随分と負担が軽減されたように感じていました。そのような状況もあってか，数年後に人間科学の先生方から体育の教員に対してゼミを担当してはどうかという働きかけがあり，議論を繰り返しながら私以下の若手（当時）教員が徐々に加わっていくことになりました。この時の決断は体育教員にとってまた私が39年間東北学院大学で在籍していた中で最も大きな出来事で，教員としての方向性が大きく変化し立場が大きく変

第 1 回学部長杯ソフトバレーボール大会の風景（2004 年 10 月 12 日）
佐々木俊三学部長

第 1 回学部長杯ソフトバレーボール大会の風景
表彰式　佐々木俊三学部長

第 1 回学部長杯ソフトバレーボール大会の風景　教員チーム
（左から　赤木先生，佐々木先生，前田，松本先生，千葉先生）

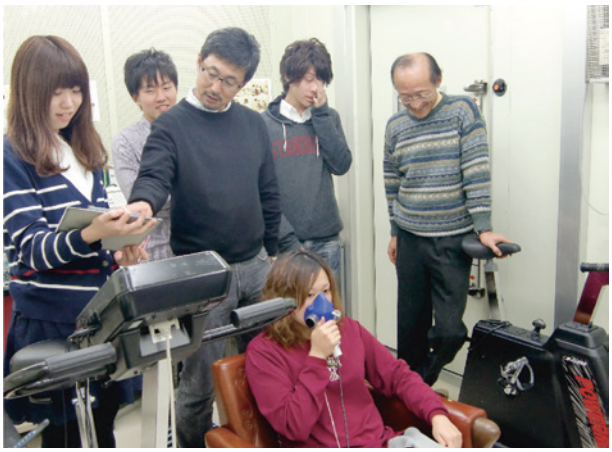
わる出来事となったからです。

当時の体育教員は皆必修の保健体育科目を担当していくことしか考えておらず，研究活動を熱心に継続していたとは言えない状況であったと思います。私自身も十分な研究活動をしていたわけではなかったため総合研究の指導が本当にできるのか不安で一杯でした。しかし大学教員として生き抜くためには人間科学専攻の教員としてやっていくしかないと決め自覚を持って行動するよう心掛けるようになっていきました。1993 年から初めて千葉先生がゼミを担当され，3 年に一度のローテーションで担当するという周期が始まり今では毎年担当する現状になりました。当初は体育関連科目も 2 科目しかなく，人間科学には体育の予算が全なかったためスポーツ実技で使っていた機器等を使うような工夫をして総合研究テーマを決め実践させていくしかありませんでした。人間科学の学生で体育学の領域で総合研究を書く学生の環境が他の分野の学生と比較して余りにも恵まれず，不平等感があり先行きの不安感が募っていた時代でした。

その頃の体育の予算は 1，2 年生の保健体育科目が必修であったため各専攻とは別に単独で予算が組まれていました。大綱化による保健体育科目が必修科目から外れたこと，体育教員がゼミを担当するようになった状況下で，保健体育関連予算を人間科学専攻に組み入れるようにという働きかけがありました。教養教育に関わる予算は必ず確保していただけるという約束と共に人間科学での専門に関わる予算も確保されるという約束の下で人間科学の予算が一本化されて現状に至っています。このことは人間科学の他の分野の予算を削減して体育領域の予算に充てるということは全くなく，保健体育関連科目に充てられていた予算は大幅に削減されたものの残り部分を人間科学での体育学領域の予算として組み入れることができ，今考えると非常に良いタイミングで移行ができたと感じています。

2.　改組に関わる思い出

次に 2005 年の改組の頃の状況を振り返ってみることにします。2004 年 3 月の専攻会議で専攻主任をされていた遠藤恵子先生が図書部長に昇任されることとなり，専攻主任との兼務は無理という理由で次期専攻主任の選挙が行われ私が選ばれてしまいました。全く心の準備もなくただただ困惑するばかりでした。そしてすぐに 4 月となり解らないことばかりの雑務に追われながら，言語文化専攻の当時の専攻主任である伊藤春樹先生にご指導を仰ぎながら日々を過ごさなければなりませんでした。一方教養学部の改組も控えていたためこのことにも大いに時間を費やす必要がありました。改組に関する諸条件を振り返ってみると，回避できないかなり厳しい条件が付きつけられていたように記憶しています。端的に言うと教養学



2011 年度体育実験実習における安静時代謝測定の風景
千葉先生，前田と受講生たち

総合研究のデータ収集時の風景
人間科学科入学の 1 期生の双子の姉妹（前田ゼミ）

部の赤字体質の是正であった。3 専攻で定員 200 名であり教員総数は当時 100 名ほどでコストパホーマンスが低い学部であるという大学からの評価であった。そのため新しい学科を新設し, 各学科の定員を 100 名に増やし 4 学科 400 名定員にしなければならない状況であった。新学科の構想は史学科からの移籍されてこられる先生方と 3 専攻の所属の教員を移籍させ, なお高校生から見て魅力的に感じて受験生が多く見込める学科を作るということであった。人間科学専攻からは佐久間先生，松原先生が移籍されることとなった。この点については地

域構想学科の先生が詳しく書かれると思うので余り触れないことにします。

新学科の設立にあたっても新学科のための新しい施設を作らないという条件も付けられていました。そのため新学科が十分機能できるようなスペースを確保するため，佐々木学部長の指示のもと伊藤先生を中心に泉キャンパスの建物の図面を見たり，教室や各専攻で使用していた研究室・実験室の使用状況を調べたりとかなりの労力を費やしスペース確保に奔走しました。その結果，5 号館の使用頻度の低い大教室を新学科の必要な研究室等に改修し，4 号館の情報科学が有していた生命系の実験室や研究室を縮小し，新学科が使用できるよう変更するなどの努力をしてスペースが確保されたと記憶しています。人間科学においては定員増に対する対処が必要であり，各分野の機器備品の増設をするようにしました。4 号館の 6 階にあった会議室を AV 機器が使える人間科学実験実習室に改修し，教育学が持つ教育工学の部屋はデスクトップ PC をノート PC に変えて PC の台数を増やし可動式の机や椅子に変えて定員増に対応できるよう機能的対処をしたことが大きな変更点であったように思います。人間科学科の教育目標でも心理学・社会学・教育学・体育学の 4 領域を幅広く学ぶということが示されるようになったため体育学分野では定員の 4 分の 1 の学生を受け入れる体制作りが不可欠となっていた。そこで体育館内のスペースを人間科学科の科目である体育実験実習が機能的にできるよう案を色々考えました。その結果，実験室の隣にあった会議室をデータ処理室に改装し PC を設置するスペースを作り，人間科学科だけではなく地域構想学科の先生方も共有できるよう工夫しました。また 2 階にあった研修室を 2 分して間仕切りし，運動時の脚の力を力量計で測定できるようにし，ハイスピードカメラを使用した画像の動作分析ができるような運動解析室を作り体育実験実習の質的向上と定員増に対する対応を行ないました。またゼミ生がいつも活動するようなスペースがなかったため 3 号館 6 階の空室となっていた個人研究室を改装し，体育学資料室，運動学演習室，体育学総合演習室の 3 つのゼミ室を作りゼミの時間や総合研究を行うことが機能的となった。

一方 4 学科体制に移行する問題点は 3 専攻体制から定員が 2 倍になることで多くの受験生を集めなければならなかった。そこで佐々木学部長は広報活動を活発にして受験生の確保するため，教員が高校訪問をしてリクルート活動をしていくという提案をされ，まずは学科長がその任にあたるよう指示がありました。私自身は岩手県の水沢高校，千厩高校，一関第一高校に出向いたと記憶していて，高校の対応も偏差値の高い高校ではあまり良い対応はしてもらえず，偏差値が低くなると歓迎されたような記憶があります。このようにして多くの教員が慣れないリクルート活動をしなければならないようになり反発も大きかった。このことから現在の入試部の仕事の一部となって変化していった。

人間科学科でも定員が 100 名で実質 125 名を収容するということが前提でした。そこで 2

名のグループ主任が付き2グループ体制になることは確定していたものの，定員増による学生の質的低下を招き，少人数教育も十分にできなくなる可能性が高いことが見込まれていました。そこで人間科学科として何か対応策はないかと考えていたとき，朝日新聞出版社の雑誌AERA（?）に特集で当時の色々な項目での大学ランキングが掲載されていました。その中で面倒見の良い大学というランキングの上位に私の母校の広島大学が入っていました。その内容は私が入学した時に行われていたことがそのまま実践されていることでした。当時に当てはめると教養部の先生方が全員で全新入生を適正人数に分担し，チューターとして学生生活全般の指導をするという体制でした。要するに勉学だけではなく何事においても相談に乗り面倒をみるというシステムでした。1年時には頻繁には相談には行かなかったもののそのような窓口があることで安心感があったことを思い出したのです。そこで人間科学科が学科としてスタートする際にこのシステムを採用し面倒見の良い学科と評価されるようにしたいと考え学科会議に提案しました。私自身のイメージが学科内の先生方に十分に伝わらず反対意見も多々あったように思いますが，グループ主任とチューターの役割分担等の曖昧な点もある中，見切り発車して千葉学科長の時期に現在の位置付けや役割が明確化され現在のシステムとなっている。

最後になりますが教養学部の創設時の人間科学専攻ではベテランの経験豊かな先生方と多くの有能な若さあふれる教員とがうまくマッチしよく考えられたカリキュラムの下で教育が始まり，人間科学科へと発展しその使命を果たしてきています。しかし，現代社会のこの30年間という時間軸を考えた時に，社会環境は大きく変化し高額なPCを1台設置することも大変な時代からほぼ全員の学生がスマートホンを持つ時代になっています。人間科学科の教員は創設期のメンバーがまだ3分の1程度は残っており，カリキュラムの面でもマイナーチェンジはされてきているもののほぼ変わってはいません。このような背景から考えると，教養学部や人間科学科の使命や役割も変わらなければならない時期に来ているのではないかと感じる次第です。私自身は39年間の教員生活を終えるにあたり，30年間は人間科学科の教員として多数の有能な学生の皆さんと，また色々な分野で活躍されている先生方と一緒に協力し思いやりを持って活動ができたことに喜びを感じ，また感謝の気持ちで一杯であることをお伝えし私からの「思い出の記」の終わりとさせていただきます。

経歴

1951 年　愛知県名古屋市生まれ

1976 年　広島大学教育学部中学校教員養成課程体育専攻卒業

1979 年　筑波大学大学院修士課程体育研究科コーチ学専攻修了

1980 年　東北学院大学教養部　助手

1983 年　東北学院大学教養部　講師

1986 年　東北学院大学教養部　助教授

1999 年　東北学院大学教養学部人間科学専攻　教授